

第1班講師菅又副委員長への質問

平成29年9月10日

登山専門部菅又副委員長に質問させていただきます。第一次報告書で指摘された内容については既に要望を出し今回説明いただいておりますので、それ以外のことで質問をさせていただきます。

私たちは、この雪崩事故がどうして起こってしまったのか、何が足りなかったのか、どうすれば回避することができたのかという根本的な疑問に対する回答を求め続けています。

検証委員会第一次報告書、国立防災科学技術研究所の現地説明会、生徒たちの証言などを基に、私たち自身が検討を重ね、いくつかの「確かなこと」にたどりつきました。そのことを基にして質問をさせていただきます。

すでに説明会の中で回答いただいた内容への質問もあるかと思いますが、事前を作るためにそのような重複もできます。質問は遺族等の切実な気持ちですので誠実なご回答をお願いします。

《私たちにとって確かなこと》

- 1 本件の講習会は、積雪期登山の正しいあり方と安全登山の知識・技術を習得し、登山事故防止を目的にしている。登山の事故防止を学ぶ講習会で、絶対に起こしてはならないのが死亡事故だ。しかし、訓練の場で雪崩事故に遭遇し、8名の尊い命が奪われた。この死亡事故の事実を、講習会の主催者である高体連は、真摯に、重く受け止めなければならない。そうしなければ8名は救われない。
- 2 雪崩に遭遇するかどうかは、人間がそこにいたかどうかだ。雪崩の発生原因の問題ではない。雪崩回避は、そこに入るかどうかの人間側の判断の問題だ。
1班から4班までが雪崩に遭遇した。回避ができなかった。1班は8名が存在と未来を一瞬にして奪われる、想像を絶する痛ましい結果になった。
当日あの現場に行くことを決めたのは指導者の判断だ。生徒ではない。雪崩回避ができなかったのは、指導した登山専門部役員と各班講師の状況理解と判断が間違っていたからだ。
- 3 危険を知らせる情報はたくさん出ていた。気象予報も、その日の気候も、地形的条件も、積雪量も、雪の状態も、視界も、これらの全てが、雪崩の危険を知らせる情報を指導者に送っていたが、正しく受け止めることができなかった。その結果雪崩を回避する機会を逃し、雪崩に巻き込まれてしまった。
- 4 様々な雪崩情報に接しても、正しく危険性を受け止められなかったのは、感性が鈍くなっていたからだ。感じ取れなかったから、安全だと盲信し、雪崩事故の現場に入っていった。
茶臼岳登山を中止したことで危険を回避できたと思い、基本的な安全確認や情報収集をしなかった。各班講師は、情報から雪崩の危険性を感じ取ることができなかった。感じ取れないから、漫然と安全だと信じ込み、雪崩の現場にキックステップで登ってしまった。

5 大雪注意報、雪崩注意報が発令されている中、ラッセル訓練を実施した指導者の判断は間違いだった。

あの日、平地でも寒く雪が降っていた。大雪や雪崩注意報が出ている中で、冬山装備も十分でない状態で、なぜ、普段使ったこともない危険ルートに登り、結果的には登山と同じような訓練を行ったのか。なぜ「止める」という考えが起こらなかったのか。万が一のことをどうして考えられなかったのかなど、指導者の認識と判断の甘さに強い憤りを感じる。

6 訓練時、各班講師は本部との連絡や講師間の連絡をしていない。相互チェックや助け合う関係がなかった。このことが危機判断を遅らせ、被害を大きくした。

7 ラッセル訓練に計画を変更し、雪崩の危険のある斜面に入ることを決めた指導者たちには日々の生活がある。指導者の言を信じた生徒の多くは若い命を散らした。何てことだ。どうしてこんなことになったのだ。

遺族は突然悲しみの底に落とされた。悲しみの底はかすかな明かりさえ届かない、出口のない谷底だ。当たり前前の日常を取り戻したくて、どこに向かっていけばまた息子に会えるか、暗い底でいつまでも考え続け、迷い続け、泣き続けている。

《第1班講師菅又副委員長への質問》

1 雪崩の危険性の認識について、お聞きします。

(1) 講習会の活動場所（ゲレンデ・樹林帯・茶臼岳）における雪崩の危険性について、どのような考えをもって講習会を実施していたか。そうした考えの根拠になっているのはどのようなことか。

(2) 樹林帯での活動と雪崩に遭遇する危険性について、どのような認識をもっていたか。

(3) 樹林帯の先、天狗の鼻までの樹木のないところにおける雪崩の危険性について、どのような認識をもっていたか。

(4) 雪崩が起きる可能性については、何で判断をしていたか。

(5) 今回の積雪（証言や記録により違っているが）では、茶臼岳で雪崩がおきる可能性がどの程度あると感じていたか。

(6) 気象情報の収集について、菅又副委員長はどのような考えをもっていたか。また、実際に、いつ、どこから、どのような気象に関する情報を得ていたか。

(7) 今回の気温の変化と積雪は、どのような場所で雪崩を引き起こすと思っていたか。

5/28の説明会の回答では、27日までの気温の変化と積雪により、雪崩を引き起こす可能性が増すことを知識としてもってはいたが、今回の講習会中、そのような状態になっているとは思わなかったと回答している。

20日以降の天候の変化と26日夜からの新雪であることと、地形的条件等を考えるならば、雪崩の危険性が高くなることは山岳関係者なら誰もが予想できることである。どうして、今回の講習会最終日がそうした状況であることが予想できなかったのか。余りにも無頓着、幼稚すぎる危機意識ではないか。

保護者はどうしてこんな人達に子どもの命を預けたのか、悔やんでも悔やみきれない。

(8) 大雪注意報、雪崩注意報については、いつ知ったのか。

5/28の説明会では、現地にいってからは確認していないと回答している。例年にない大雪（19年ぶりとか）が降っているのに、なぜ山の気象情報を入手しようとならないのか。

こうした気象情報を収集しないことが組織（登山専門部役員）で行われたとすると、この事故は起こるべくして起きた事故といってよい。そうした指導者の言葉を信じた生徒たちが余りにもかわいそうである。

(9) 弱層テストを実施したのか。その結果どういう分析をしたのか。

弱層テストについて、指導者が全員集合した中で実施し評価することが必須であると思う。積雪期の安全登山ということからも、実践的研修にもなると考えている。

(10) 第2グレンド奥以外に、雪崩発生危険性があると考えていたところがあるか。

事前調査、積雪量、地形的条件、天候の変化等を考えると雪崩が発生しやすくなることが予想できる。

(11) 第1次報告書の後の聞き取り調査で、「滑落だけは心配した。雪崩ということ心配した人は一人もいない。」と、検証委員会委員長は説明した。菅又副委員長は、雪山登山を計画しているのに、滑落は心配したが雪崩は心配しなかったということか。

(12) 滑落を心配して茶臼岳登山を中止した。ラッセル訓練でも滑落を心配したということか。

(13) 5/28の説明会での質問で、27日まで気温の変化と積雪により、雪崩の可能性が増すことを知っているとは回答している。知っているのに雪崩ではなく滑落を心配したということか。

2 ラッセル訓練への計画変更の判断について、お聞きします。

(1) 27日の朝、前日からの降雪で雪が積もっていることは予想したか。

(2) 雪の状況、降雪量については、どのようにして調べたか。そのとき何を思ったか。

(3) 積雪量について、15cm位と回答したが、測定はしたか、測定した場合、どこで、どのように調べたか。

(4) 朝目覚めたとき、雪は降っていたか。風は吹いていたか。視界はどうだったか。茶臼岳の頂上は見えたか。

(5) 27日朝、天気予報で現場付近の情報を入手したか。入手しなかったとしたら、それはなぜか。

(6) 猪瀬委員長から電話が入る前に、実技講師CLとして、27日の予定について、何かすでに決めていたことがあったのか。

(7) 27日の相談を電話でおこなうことは、前から決めていたことか。菅又副委員長としては特に不満はなかったのか。

(8) 猪瀬委員長から電話が入ったときに、菅又副委員長は何をしていたのか。渡辺前委員長は何をしていたのか。

(9) 相談の電話のときに、天候や積雪などを確認したと証言しているが、どのようにして、誰と誰がどのようなことを確認したのか。

既に個人が調べたことを電話で確認したという意味であるとする、どのようなことが、

誰と誰とで、確認できたのか。

- (10) 渡辺前委員長がトイシから戻り、話に参加したのは、話がどの程度進んでいたときか。
- (11) 登山中止はだれが提案したのか。3人とも同意見であったのか。
- (12) 登山中止の最も大きな理由は何か。
- (13) 登山中止の話のときに、大雪注意報、雪崩注意報の話がでたか。
- (14) 登山中止の後に、菅又副委員長として、ラッセル以外にもどのような選択肢を考えていたのか。
- (15) 3名の会話の中でラッセル訓練という言葉が使われたか。誰がどのような言い方で最初に提案したのか。
- (16) ラッセル訓練の話が出たとき、樹林帯は活動の場所として想定されていたのか。樹林帯という言葉が誰が使ったか。
- (17) ラッセル訓練の話が出たとき、樹林帯の先については活動の場所として想定されていたのか。樹林帯の先の雪面について誰か何か言ったか。
- (18) ラッセル訓練の場として樹林帯とその先についても、3名とも想定して話をしていたか。
- (19) 渡辺前委員長の証言の中に、ラッセル訓練の場として「グレンデの安全な場所」という言い方があるが、「グレンデの安全な場所」という言葉は3人の話の中でできたか。
- (20) 「グレンデの安全な場所」という言葉は、27日朝の講師打ち合わせの説明として使っていたか。
- (21) 「グレンデの安全な場所」は全体に周知されたか。
- (22) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯もはいるのか。
- (23) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯の先もはいるのか。
- (24) ラッセルとはどのような行為なのか。キックステップとはどのような行為なのか。
- (25) ラッセル訓練への変更は、登山ルートの変更となることを意識としてもっていたか。

3 実技講師打ち合わせについて、お聞きします。

- (1) 3名が実技講師打ち合わせで発言をしているが、それぞれどのような内容の発言をしたのか。
- (2) 第2グレンデ奥は雪崩の危険があるので立ち入らないという指摘は誰がしたのか。
- (3) 「スキー場周辺」という言葉を使っているが、具体的にはどの範囲であるか。
- (4) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」には樹林帯は含まれていたのか。
- (5) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」には樹林帯の先は含まれていたのか。
- (6) この時点（講師打ち合わせ）で、雪崩の起こった場所は視界不良で見えてなかったと証言している。見えてなかったということは、そこは危険であるという意味ととらえられるが、そうした認識をもっていたか。
- (7) 講師打ち合わせのときに、顧問の誰かが「雪が多いから十分に気をつけよう。あまり上には行き過ぎないようにしよう。」といったと証言があるが、その発言を聞いたか、聞いたとき、何を感じたか。

4 ラッセル訓練時について、お聞きします。

- (1) 大きな木まで横一列で進んだのはなぜか。
- (2) 樹林帯に入ってから縦一列にしたのはなぜか。
- (3) 副講師が不在であったが、副講師がいたならば、どの位置についてもらうのか。
- (4) 副講師がいたならば、判断のときに相談したか。
- (5) なぜあのルート（大きな木の左側）を選択したのか。そのコースに行くように指示したのは誰か。
- (6) 樹林帯に入るとき何かを感じたか。生徒たちは何か言ったか。生徒たちはどのような様子であったか。
- (7) 第1班が樹林帯のルートを選択したときに、他の班も樹林帯の中に入ってくると予想していたか。
- (8) 樹林帯の斜面で休んでいるときに雪を掘って雪の層を確認したとあるが、弱層テストを実施したということか。どのように実施したのか。どのような評価をしたのか。

(9) 第2班が右側を登っていることを予想していたか。登っていることを把握していたのか。見えていたのか。

(10) 第3班、第4班が、同じルートを登ってくることを予想していたのか。見えていたのか。

(11) 第2～4班までの登山の状況がある程度把握していたのか。

(12) 第2班が樹林帯の中だけで、引き返したことは知っていたか。

(13) 第2班渡辺講師から引き返す通信をもらったならば、菅又講師も引き返す判断をしたか。

(14) 第1班だけが樹林帯を抜けて登っていることを分かっていたのか。不安はなかったのか。

(15) 第1班が全部の班の先頭で登っていることを認識していたか。

5 樹林帯を抜ける場面について、お聞きします。

(1) 樹林帯を抜け雪面に出たところで止まるよう指示したのはなぜか。このとき何を感じ、何を考えたか。

(2) このときの積雪はどの程度であったのか。

(3) この時点でも菅又副委員長は最後尾にいたのか。こうした隊形(順序)であったのはなぜか。

(4) 樹木のない雪面で30度を超える斜度があり、雪崩がおきやすいことは、予想ができるが、この時点ではそうした考えはなかったのか。

(5) 14名がキックステップで弱層の斜面を登ることが、雪崩を誘発することになると、この時点では予想していなかったのか。

(6) 小さな木が数本生えているところで止まるよう指示したのはなぜか。そのとき何を感じ、何を考えたのか。

(7) 生徒たちはなぜ前に進もうと何度もいつてきたのか。そのとき何を感じ、何を考えたのか。

(8) 菅又副委員長は、どこまでならばまだ安全と考えていたのか。

(9) 樹林帯に入り、そこを抜けて雪面に進むまでの間に、本部あるいは他班の講師たちと進路やコースについて情報交換をしたか。しなかったとするとそれは何か理由があったのか。春山安全登山講習会ではこうしたこと(通信をしあわないこと)が普通であるのか。

(10) 自分の学校の生徒（真岡高校）の講師の場合でも、やはり同じルートを選び、樹林帯を抜けて進んでいったと思うか。

6 無線通信について、お聞きします。

(1) 講習会等での無線通信ですが、普段はどのようなときに連絡し、どのような会話がなされていたのか。

(2) この春山安全登山講習会の2日目以降、菅又副委員長はどのようなときにどのような通信をしていたか。

(3) 3日目、事故前までに、菅又副委員長は誰とどのような通信をしたか。

(4) 菅又副委員長は、ラッセル訓練開始の後、各班講師から活動状況など何らかの情報を受信したか。

(5) 本件講習会では、無線通信をどのようなときにどのように使うか、講師たちに説明し、共通理解をさせたか。

7 7年前の雪崩事故について、お聞きします。

(1) 本件講習会に参加する時点で、平成22年3月27日、春山安全登山講習会において郭公沢最上部において実技講習会を実施していた際に発生して雪崩について、知っていたか。

(2) 知ったのはいつか。どのような経緯で誰から知らされたのか。

(3) 今回の事故を受け7年前の雪崩の件を思い出したか。そして、どう思い、どのような行動をとったか。

8 春山安全登山講習会について、お聞きします。

(1) 春山安全登山講習会は、栃木県内の高校生にとって本当に必要な講習会であるか、検討すべきだと思うが、どう考えているか。

検討すべき理由は以下である。

- 長い歴史をもつ安全登山講習会であるが、絶対に起こしてはならない雪崩事故により8名の死亡者をだしてしまった事実は非常に重大だ。同じスタイルでの春山安全登山講習会の開催は、遺族、被害者は絶対に賛同しない。
- 雪崩に遭遇するか、回避できるかは、その危険場所に入るかどうかで分かれる。その判断は最終的に各班講師に任されていた。班の講師の判断には、雪崩に対する知識や状況理解、危機意識や安全管理が深く関わる。計画変更決定者の3名だけの問題ではなく、登山専門部全体の問題だ。同じ感覚を持つ指導者が講習会を運営することに、遺族等は納得できない。
- この講習会自体がいくつもの矛盾を抱えて継続されてきた。例えば、最も講習を必要とする1年生は参加していない、春山や夏山より講習会の方が積雪が多くより危険性が高い、雪山登山講習で夏山安全登山を学ぶ、生徒と経験の浅い顧問がともに受講者、積雪期の安全登山

で何を学ぶのかが不明瞭などがあげられる。

- 多くの学校の生徒を集めて行う良さは、初日の全体講義以外あまりない。第2日目以降は学校別の活動である。実技指導は各学校の実情によって違っている。第2日目以降は各学校が単独で行っても同じ成果があげられるだろう。
- 多くの学校の生徒と顧問が集まって実施するためマイナス面が出てくる。一つは責任者が曖昧になることだ。今回も高体連会長や登山専門部長が責任者であるが、直接的にはかかわらない。各校が主催者になれば、校長が責任者になり、安全管理や危機管理がより徹底される。二つ目は、今回のように生徒と講師が別学校という班編成ができてしまい、生徒との信頼関係ができないまま指導するマイナス面が大きい。

(2) 高校生の雪山登山は原則中止すべきだと思うが、どう考えるか。

7年前にも同じこの春山安全登山講習会で人為的な要因である雪崩事故を起こし、教員と生徒が被害にあった。そのことが広く県内山岳部顧問や登山専門部に教訓としては残されず、また今回も同じように人為的な誘発で発生した可能性のある表層雪崩を回避できず、8名の若い命が失われた。この事実が生徒や保護者に与えた影響は計り知れない。

また、文部科学省では以前から冬山登山で「原則高校生の冬山登山は禁止」の通知を出しているにも関わらず、県内ではいくつかの学校が雪山合宿と称して冬の登山を実施し、更に本件の講習会で雪山登山を実施している。講習会という名目で実施し、必要な基本的手続き等も省略し、装備や準備も十分に整っていない状況で、未熟な高校生を雪山につれていっている。

こうした登山専門部の軽薄な判断と行動は、生徒の命の重みや雪山で生徒の命を守ることがいかに難しいことであるかを忘れたような思考と行動である。

基本的な安全確認や危機管理といったことを自分たちの経験則だけに頼って講習会を運営し、生徒を指導してきた雪山登山は、原則中止すべきである。

9 登山専門部は何度でも自分たちの判断と行動について何が足りなかったのかを検証しなければならぬ。このことについてどう考えるか。

特に、今回の事故に至る第3日目の朝のラッセル訓練へと決まっていって流れをもう一度見直し、どこに問題点があるのか、何が足りなかったのか、どのような知識が必要であったのか、何がそうさせたのかなど、再度問題点を明らかにすることが、類似の雪山登山における事故防止には欠かせない。

高体連や登山専門部は、検証委員会にだけ任せないで、今回の雪崩事故を生み出している背景と要因を調査検証しなければならない。問題は指導者の知識や技術だけでなく、その判断と認識や意識の問題であると内省し、指導者の集まりである組織の体質や危機管理能力についても調査分析を行い、真剣な検討と徹底的な改善を図らなければならない。それができなければ、また同じような判断と認識による事故を起こしてしまう

10 最後に

(1) 今回の雪崩事故について、現時点での菅又副委員長の見解をお聞きます。

ア 雪崩事故はどのように起きてしまったのか。

イ 何が足りなかったのか。

ウ どうすれば回避できたのか。

(2) 菅又副委員長は、今後も高等学校で山岳部顧問として指導するつもりか。